



1

とだなのお風呂においてある、銀色のつつみ紙でくるまれた四角いお風呂よう石けん。

それが、セッケンくんです。

セッケンくんは、なかまの石けんたちに、いつもこういわれていました。

「わしら、石けん一族のやくめは、たっぷりとあぶくをだして、使ってくれる人をきれいにすることだ。人の役にたつことだ」

でも、セッケンくんは、あぶくをたてるのはイヤでした。だって、あぶくをたてればたてるほど、自分のからだだが、とけて、小さくなっていくのを知っていたからです。

作・福田 隆浩
絵・きくち こずえ

「ぼくは、まだ、いっぱい楽しみたいんだ。お風呂でとけてしまうだけの、じんせいなんて、まっぴらだ」

そうセッケンくんは、思っていました。

でも、ある日のこと。セッケンくんは、ついに、つつみ紙をはがされ、お風呂場へとつれていかれました。

その家に住む男の子、サトルくんが、
「ぼく、今日から、ひとりでお風呂に入るからね」

と言いだし、セッケンくんを使うことになったのです。

サトルくんの家のお風呂は、窓から海が見えます。ひいおじいさんが作った自慢のお風呂です。

「うわー、いいにおいのセッケン！」

サトルくんはママから受け取った石けんに話しかけました。